

氏名	岡 田 幸 司
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 962 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和53年 6 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学 位 論 文 題 目	肺癌患者における血清ロイシンアミノペプチダーゼに関する研究 一特にアイソザイムと病態との関連について一
論 文 審 査 委 員	教授 折田 薫三    教授 水原 舜爾    教授 木村 郁郎

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

肺癌 34 例を対象として血清ロイシンアミノペプチダーゼ活性値, isozyme 分画値 (セルロースアセテート膜電気泳動法による) を求め, 胃癌 34 例, 乳癌 12 例, 非腫瘍性肺疾患 10 例, 縦隔腫瘍 9 例を対照とし, 肺癌における本酵素の動態の臨床的特殊性について, 次の結果をえた。なお, 対象はすべて, 肝・腎機能に異常のない術前血清を使用した。

- 1) LAP 全活性値では, 肺癌患者は健康人にくらべ有意の上昇がみとめられた。しかし, 肺癌と肺癌以外の胸部疾患との間には有意の差はなく, 異常高値 (250 G・R u. 以上) を示したものは肺癌 27 %, その他の胸部疾患 2 % で, 異常高値の 90. % を肺癌がしめた。
- 2) 肺癌では, LAP isozyme Y 分画比は, 健康人, 非腫瘍性肺疾患, 縦隔腫瘍にくらべてあきらかな上昇を示し, 健康人の上限を越えたものは, 非肺癌群では 2 %, 肺癌では 70 % であり, 異常高値症例のうち 96 % は肺癌であった。
- 3) 肺癌の病期別に LAP の変動をみると, 全活性値においては, 特に関係はみいだせなかった。しかし Y 分画比では病期の進行にともなって上昇し, 異常高値症例出現率も I 期 50 %, II・III 期 70 %, IV 期 100 % と増加した。
- 4) 肺癌の腫瘍の大きさと血清 LAP 活性値の間には, 差はみられなかったが, Y 分画比では 5 cm 以上と 5 cm 以下の症例間に差がみられた。又異常高値症例は, Y 分画比で共に約 70 % で差はみられなかった。
- 5) 肺癌のリンパ節転移の程度をみると, 全活性値では相関はみられなかった。しかし, Y 分画比では, 転移陰性か, 陽性であっても縦隔内にとどまるものに比べて, 縦隔外に達するものでは有意に上昇し, 異常高値症例出現率も転移の広がりに応じて上昇し, 縦隔外に達するものでは 100 % であった。

- 6) 肺癌の組織型とLAPの間には、関連性は認められなかった。
- 7) 肺癌とどのように胃癌ならびに乳癌でも病期の進行に応じて全活性値、Y分画比の上昇がみられたが、肺癌に比較して上昇の程度は低く、異常高値症例出現率も肺癌に比較して低率であった。
- 8) Y分画活性値においてもY分画比と同様の傾向をとった。

以上を要約すると、肺癌患者におけるLAP全活性値の変動は、特に有意義でなかったが、isozyme分画値のうち、Y分画値の上昇は、肺癌の病態と密接な関連を示し、特に早期より発現する点と、肺癌の進展に伴なって段階的な上昇をする点において、診断と治療に関する重要な示標となりうるものと考えられる。また、その変動は、胃癌、乳癌に比較して量的には、かなりの特異性を有するものであった。

### 論文審査の結果の要旨

本研究は未開拓な領域である肺癌の進行度、組織型などとの血清ロイシン・アミノペプチダーゼ値およびそのアイソザイム分画値の相関を臨床的に検討したものである。とくにアイソザイムY分画の上昇が早期よりみられること、逆にこれを応用して肺癌の早期診断に有用であることを明らかにした点は価値ある業績と認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があるものと認める。